

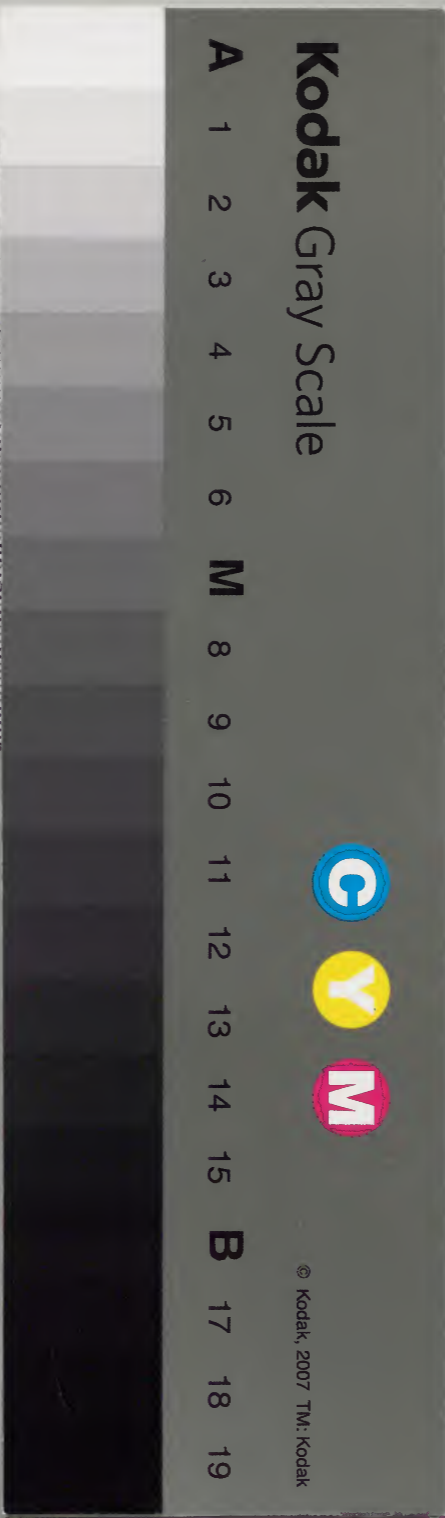
文苑雜算系抜書二

言册

和書門		二五九
類	號	七八七
函	架	六九三
册	冊	二〇

內閣文庫		二五九
和書	號	七八七
冊	架	二〇
函	冊	四

內閣文庫	
番號	和 25987
冊數	20 ( 2 )
函號	201 39



文苑雜纂拔書

二

集應元 壬辰年卷目錄 附二卷已年

一景隆元日和歌 二首

一恭且夢想和歌一首 附勸進和歌 二十四首

一交安女 壬辰三月十日春林中御會始和歌 古一首

一交安女 壬辰三月二十日仙洞御會始和歌 十七首

一元日交安女 壬辰三月十日春室貞和歌 三首

一殿中御連歌 八首

一水無瀬御法樂和歌 二十四首

一聖廟御法樂和歌 古一首 一光海寺記

一家光云奉悼文 年和歌 三首

一述懷 年市中次和歌 十首

一於現龍院名月兼頌并為在和歌 二十首

一三十番歌合 六十首 一特場名歲門梅和歌 十首

一賴隆朝巨御雜以當座和歌 四首

同 兼應三 甲午 年卷目錄 附明曆元乙未年

一殿中御連歌 八首 一景隆歲言初春和歌 一首

一冲山信治亭會和歌 十六首

一仙洞御製 并花町採和歌 三首

一乙未正月十一日殿中御連歌 八首

一仙洞名月御會和歌 十六首

一月和歌 十七首 一名月御會兼頌和歌 一首

一名月和歌 十六首 一戀和歌 二十首

同 明曆二 丙甲 年卷目錄

一云家名保春社玄和歌 十七首

一殿中御連歌 八首 一仙洞御製 二首

一牌應山殿中經文和歌 二十首 附尚嗣和歌 二首

一五十三夜和歌 十一首

同 明曆三 丁酉 年卷目錄

一景隆貞信歲旦歲言和歌 六首

一殿中御連歌 九首 一貞信戀和歌 十首

一賴元朝長賴隆朝長御詠 六首

一仙洞御製 一首 一景隆十三夜和歌 二首

一中朝十雷頌 一首 一洞政集道記并和歌 一首

文苑雜纂

壬辰

元日

景隆

け君のあやむ代のま状とあましく初めるけさの静かな  
くねけり一よるうる春よあひて行りて去る心も

十二月廿二日れ夢想きくら屋よわらけてさね

きりきりさ川民のわぬとあまのいよありてさ

とてけけくくをる歌

春歌

朝比奈内通

きりりつるる辰は木のうきめてさめりきりりてさめ

頼重朝臣

葛城山の青柳をさうひてさみしきさきさきさき

頼元朝臣

まのよとくあそとく川を物らハ云れんやのよの

頼隆朝臣

山さるる辰とひん今物らハふ年れまハ云あまなり

信政 中山市正

に川乃るるれのみとらさるる神のみんやうつる春  
にもまのよとくあそとく梅のよとくあそとくあまなり

信治 中山備前守

野色れあハまの消あくとるるまよとらるる聲のよとくあ  
れとらるる声れとらるるまよとらるるまよとらるるまよとらるる

氏信 白江大馬先

海よか一秋乃るるれのまよとらるるまよとらるるまよとらるる

夏袂

言貞 小野角右衛門

ふのよとくあそとく衣きらとらるる春ハあまなり天の雲ハふ

直季 庄六弟之侍

てのよとくあそとくハ云れまよとらるるまよとらるるまよとらるる

牛庵

みーのよとくあそとくハ云れまよとらるるまよとらるるまよとらるる

景隆 北河原基良

まのよとくあそとくハ云れまよとらるるまよとらるるまよとらるる  
まのよとくあそとくハ云れまよとらるるまよとらるるまよとらるる

信尋 真野猪助

ららとくあそとくハ云れまよとらるるまよとらるるまよとらるる

秋歌

卜出

かきりや秋の風はほら玉の井はみきりの桐はさくくたれ  
きりきりたる名つまじしあはらの下は露のまじりあはれ

林季 片山八世清

ゆいよのこゝろの秋の風はさくくたれ

宗好

あらしふあらしとこなる月の秋は吹めせしる常盤の声

室貞 小野宗貞

あらしは娘の袖のわらひきりよあらしの風はさくくたれ

定久 道長内膳

あらしはちてよ秋の風はさくくたれ

渭川

あらしは秋の風はさくくたれ

あらしは秋の風はさくくたれ

あらしは秋の風はさくくたれ

守政 牧島守政

あらしは秋の風はさくくたれ

あし歌

君充 藤原君充

あらしは秋の風はさくくたれ

傳庵

あらしは秋の風はさくくたれ

あらしは秋の風はさくくたれ

恒通

箕川恒通

あらしは秋の風はさくくたれ

氏成 遠友勅書

正隆

雜歌

或女

にふるまひ神ふんとふしすまれ川のなれりとしはゆきて

勝政 香平兩

きんぎょの園も月影のさすて河のほとけも河のほとけ

縁勝 永山七平

もろくしおとひるしとくをいと終し垣をたふさむに猶そ

可令 山本深雪

ひまぢりてま川よゆ松の生ま川ハ君うよひはれすよ

常知 池田五郎九郎

ふよりゆき君うん乃たけしき月しきまはるいゆ水

盈清 酒井為高

ゆよあし秋もあしぬ難波江の舟の名りぬ君うあま

慶安五年正月十九日 於 林葉裏御會和歌

霞染春色

御製

朝はくひ空にふもよみ世乃言れひりに白ふもとわが心

同向 近侍

たはゆわらまはれあつるもよみの辰よとに世よわらふ

中務卿文 八条

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

兼按政 二条

いほの目よりおぼろしくして遠近の廢文を春社のあは

兼内大臣中院

らして世の廢しぬらるるやびくともまじくをいへん

四辻右衛門

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

二条右衛門

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

滋野右衛門

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

清和寺中納言

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

藤原中納言

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

中務卿中納言

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

藤原中納言

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

水之原中納言

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ

大井中納言 鳥丸

あはれむとてまゝに孫のまゝに云ふは廢去はせしむ



九宰相中將 菟

わらわらたぐはらふしやふのまに志あしな

兼源宰相中於忘余

湖さくきりや藤乃おしよしよのまに志あしな

兼源宰相

雲れや君うめ子おまのまに志あしな

大之清徳者余余

生雲うらま風しきまは藤乃おまに志あしな

後彦相長山城下年

百愛のこまお松のしはたおまに志あしな

雅純相長庭田

まおまのまおしよしよのまに志あしな

恒房 清房

日れ海に想おゆりてまお日おまのまに志あしな

妙法院文

まハ先柳様よりまおまに志あしな

聖護院文

まおまのまおしよしよのまに志あしな

梶井文

何れ日しおまのまおしよしよのまに志あしな

青蓮院文

まおまのまおしよしよのまに志あしな

同亦日於 弘洞御會和歌

梅柳渡江春

江乃水。あさす。江乃水。あさす。ね梅柳。あさす。春

或能。あま。さ。松

江乃水。あさす。江乃水。あさす。ね梅柳。あさす。春

中勢。あま。八条

難波。あさす。ね梅柳。あさす。春

市橋。あま。二条

あさす。ね梅柳。あさす。春

美然。あま。法蓮

あさす。ね梅柳。あさす。春

道是。あま。聖護院

あさす。ね梅柳。あさす。春

通村。あま。中院家内大臣

あさす。ね梅柳。あさす。春

云。あま。心造大納言

あさす。ね梅柳。あさす。春

季。あま。滋野中納言

あさす。ね梅柳。あさす。春

基音。あま。固大納言

あさす。ね梅柳。あさす。春

雅章。あま。藤原中納言

あさす。ね梅柳。あさす。春

海光 廣橋中納言

廣橋の柳は眉をよそく梅の白くそそく

基定 持明院掌事

梅のうしろはうめはうしろをまてま柳をひく

資慶 鳥丸掌事

梅柳うしろよそくとあなうしろにひく

嗣孝 敦寧寺

うしろのひく柳のうしろはうしろにひく

基福 園亭

春のやうにうめ村の柳をうしろにひく

具起 岩倉掌事

梅のうしろにひく柳のうしろにひく

後廣 小川坊城

梅のうしろにひく柳のうしろにひく

文苑雜纂 癸巳

元日

辛うし日や丸あき子春のこころ  
梅のけし春よさねさうの枝るる  
雪のけし春よさねさうの枝るる  
雪のけし春よさねさうの枝るる  
雪のけし春よさねさうの枝るる

元日

室貞

老松乃山けし梅のけし春のこころ

立春

分

梅のけし春よさねさうの枝るる

立春

分

時春

昌程

昌隆

玄祥

昌悦

あしきつれ梅りしは葉残しらるるひ梅のよきゆき  
よきの梅

二月十一日 御連歌

春を切し松ハ八丈のまけま  
國好しつふもまじりて山

御 昌程

天下波のきき想こころえて

玄祥

竿にぬきけりまきりしつるあ

常子

新志しよ夕しらく飛雲

其阿

月らんそやほおもるそそ

昌隆

乞らひけてあはれあまの志は葉

時春

胡き方あひくまらり水行

昌程

兼應二已二月廿六日

水無瀬殿御法樂

早春水

御製

氷力細管川をうらいつる波のまにやまけあるし

宸中寫

康道 二条後

花もよのほし梅と屋をそそきゆらりくそきく萬れ勢

定 八花

爲清 上冷泉侍従

顔もよめまると花をきていけりあれ初もくろりり

野 意葉

勝忠

けりまらなまふりて紫のいろにきみ人のもくれと痛

池 邊 友

資慶

水も風もなまふれぬれぬいひりり池乃少少

胡文衣

通茂

らるる花よりらりし月の暮中しをなす言神よわけては

侍子規

宗良 右中將

ほり場らんはくしのほらきす御下よまきりしきく夢を

蚊き大

竟然 妙法院

ふつらみる糸糸ふたい音きたる一はそとてやうらうら

新秋露

智忠

ふらふらも病やこころん萩の露をいもなきあな解る物よ

鹿鈴出

道晃

あく鹿志ハ一山田のほのらるる夢一しき秋此衣と

名不月

光平 二条右衛門

あしころえしむつりそひて月けいしす秋を浦あ

里揚衣

雅純 庭田

秋は夜をよめく里毎ようつ青半とえぬあつ衣

九日

貞清

きよれこも名物にやなまこ一せふの秋はえりこきて

ききあき

雅章

まくと秋や一花の風氣にすくくまのり下若

江休書

季吉

こころの衣をわけてはたつひてたれ一守之る發

罪敬書

通村

あつきのむねぬしをのしはあらしぬる一れを

傳言書

實清 梅園中將

くらみらぬらるしきえく願し知りぬる雲れ

窓前竹

共綱

三と御下敷のねみまにたれりりちまよ窓志之竹

夕眺中

菊後

えぬとくおむじく此遠く心平くはまらるる竹一縁

寄社後

良仁苑所友式神宮

君代りちまきふちハふりやう非るや一老とし

新之

養應二己二月廿五日

聖廟御法樂

初春之辰

智忠八條殿

山外今初ハれよ出る日志ぬとじやまハじり如之

竹嘗

貞清伏見殿

御下敷のらると清て下敷竹は祿々くされぬや良とれ多

ま曠月

光平

えちね御下敷よまててらりぬの月新れるはるる竹下の

花初田

通村

花より成りるまわつ咲まじり文よはらりよはくハ

花

御製

何とも之花れよのまら花と来れまらく一日を竹

に務

道是

時にお入にるまよ嘆後れはるははしやとと

書と西

康道

ちるたにいひりむらつらまらあなれと切しと

邓花

季吉

滋野井

よのりも月しるし一邓花のまよけりてゆふ松陰

沼高蒲

雅章

悲号井

まよくくまちらひては水とあやめしはあ福やれいん

伏雲

寧滿

花園中將

秋らり野はの水の流れててむら涼く飛雲の那

夕顔

克然

妙法院

半もこの族の根れある露あきらてや嘆文をみれ

細源

光長

らりて此のまよるそと照りし山はゆりの流し

朝萩

綱定

廣橋

あしそこのゆかきさるしあまの萩を志上り

河萩

信孝

秋らり乃存にい積くゆく水のまらりる野海に玉河

庭月

雅純

庭田

秋らり乃海穿る庭の流くようつる月之萩のひり

水御月

云業

阿野

あまの秋にいづくし水河の水乃あやらる月乳

山初鳥

基定

持明院

雲霧のくあきたぬとの輝る月小きとるあ天はるる



田家麻

慈胤

山田とてあはれなきまゝに為す秋にたるふり多

言秋

廣通

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

夜時白

弘資

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

言秋

雅陳白川

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

水鳥

宣順

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

遠嶺鳥

李賢

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

神樂

時庸 早松

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

鳥山恋

良仁 彦可

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

鳥山恋

孝治

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

鳥山恋

氏信

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

山籠燈

雅喬

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

磯松

教廣

言秋のなるに神の教れときていふあはれ白

寄神祝

通純

志の神乃んよまのつと國やとふかきあまの代き

光海寺記

言貞

みそらぬおたさうくあうまのつらえ〜  
民さるもくじ〜のいすのれはん城らふに  
あつらて水戸井貫門の君之川くさるよ  
殿つらり〜いすもさうらふ家きひあく  
三よむと川あまの家ぬのよの郊お〜秋と  
屋〜書うんともさるおり〜おほんおまの  
うらや〜しつやぬらふて〜成は〜いよま  
よの〜終つらうらはの道れきうみれ城はく  
〜手成は〜〜〜きう〜まのおさり  
玉れ煙たまのうそれ合跟とらり〜あい〜  
らぬら〜とた〜てい〜と〜ま〜よ〜の〜

慈航山光海寺とそ名付せぬある是心  
沙母儀英勝院の靈光沙位牌とそくおせ  
る<sup>おぼや</sup>念佛おぼや一之味おぼや今そく<sup>おぼや</sup>沙位牌の由寺あ  
送渡はしめて沙遠言おぼや沙位牌の由院号  
とそく<sup>おぼや</sup>寺号とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
たありたを存けぬとそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
こすし沙威らりて寺名とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
寺れ知換とぬれ世はてれを實たに<sup>おぼや</sup>おぼや  
り<sup>おぼや</sup>沙位牌とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
し<sup>おぼや</sup>沙位牌とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
ぬせし<sup>おぼや</sup>あつぬれ<sup>おぼや</sup>八月日な<sup>おぼや</sup>ぬれ<sup>おぼや</sup>沙母儀

はぬら<sup>おぼや</sup>ぬれ<sup>おぼや</sup>沙位牌とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
と波ふとそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
た<sup>おぼや</sup>ん<sup>おぼや</sup>とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
沙<sup>おぼや</sup>の<sup>おぼや</sup>沙位牌とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
ぬ<sup>おぼや</sup>ら<sup>おぼや</sup>とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
法<sup>おぼや</sup>の<sup>おぼや</sup>沙位牌とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
た<sup>おぼや</sup>こ<sup>おぼや</sup>ら<sup>おぼや</sup>とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
法<sup>おぼや</sup>の<sup>おぼや</sup>沙位牌とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
沙<sup>おぼや</sup>の<sup>おぼや</sup>沙位牌とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
た<sup>おぼや</sup>こ<sup>おぼや</sup>ら<sup>おぼや</sup>とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
ま<sup>おぼや</sup>う<sup>おぼや</sup>とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく  
病<sup>おぼや</sup>い<sup>おぼや</sup>とそく<sup>おぼや</sup>英勝寺とそく

しつとをこめしきあもほはれふいたしあはれ  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
能明とあつたあふあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは

時乃とくに孝とれ——木乃沙教乃茶のいさ  
れ供物とそぬく香とすも帛とすまのいさ  
くもとのぬれ誠敬とほく——て以てまつる侍ハ  
父母乃神とすまのいさとすも帛とすまのいさ  
あはれはハやうぬあふあさぬあふあ香としあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは  
あつたあふハあさぬあふあ香としあはれとあは



水野山は清くと成はよの阿はあゆけり  
雲と影り雨と影り近き村くれ田はくれ雲井  
ゆく雲は乃屋なるのめよ常成を青きことか  
され松乃じききらあらめを興てた  
城乃くまぬにしと城不と成てあき  
おほん神れ宮長あめの玉の手神さひ椿く  
まこれ角成るきるハ水端は清きては  
みてこれ結守のしきぬ社外は早木  
枝ときれあ成る人さ不はりてき  
指りぬよもの高ハぬはあら人  
いと所よあは成て奇ぬり是や  
あんとあはれ清んはくはあ

またおのいから積阿をぬは  
を近れ系よりくはありてさ  
そまはりし想海人位牌れ  
なまはりし物もに成はぬ  
あきくは音の煙ハ志めや  
乃ありくは花ハあしん  
つうくはる志はより貪欲利  
らまらんうねんはらぬ  
剣しあくんとと半き  
後清不二は成ることと成  
んれ清去ちるるさ  
何れ神よあ方ありと

わきまなきあきくつなれし人欲より好むる  
きりきりといひしものごとく一ふりしひもなきふりきり  
りよりのことせぬし虚無ありしる言よきまの清  
き両方浄土もさうしれ佛もなきもさうしれ其の浄  
きたに越ひて佛も浄土も浄名經もさうしれ下り志  
の氣成りぬるごとくあしはくし上れ後ハさうしれ  
わきまなきあきくつなれし人欲より好むる  
ハ唯ふり浄土もさうしれに己れ強強阿もさうしれ  
接しれ浄土もさうしれ一念念ん成ひるごとく法界量  
とわきまなき己れも佛もさうしれ己れも浄土も成り法界  
明鏡の成りて像現とさうしれしよごとくし深信  
成成れしハ要要とさうしれ四柱の佛も成りしわ

まき浄土もさうしれ時とさうしれ其の成りしれさうしれ  
こゝれ心れ佛都とさうしれしよごとくし清くはあり  
てはれあきくつなれし人欲より好むる  
一事もい強強佛と念しきまもつれ無量れ  
法も成りしれ其の成りしれ其の成りしれ其の成りしれ  
くつなれし人欲より好むる  
しよごとくし其の成りしれ其の成りしれ其の成りしれ  
孔聖のしよごとくし其の成りしれ其の成りしれ其の成りしれ  
益ありしれ其の成りしれ其の成りしれ其の成りしれ  
さうしれ其の成りしれ其の成りしれ其の成りしれ  
はれしれ其の成りしれ其の成りしれ其の成りしれ  
なりしれ其の成りしれ其の成りしれ其の成りしれ

光と海とのあはれ文字殊なりは——  
光海寺と云ふつとあはれせしむひぬこれほと  
と云て法華經營れ要なりぬ小にして大伽藍  
よと云れ維多居士れ方丈の室よひ  
みかしくけぬのりよ青成川なる人無請佛  
れ慈恵と云ふよ頂上成摩訶牟尼と云ふ極り  
水——水く之界大宅と云ふれあふ浄土に  
ゆきしつとに又様と云ふと云ふ——  
寺つとる人無千万歳福壽と得るとも云  
本寺と云ふと云ふ實光安れ法と云ふと云ふ  
れあはれん寺と云ふは法華創りる法寺と云ふ  
松の葉れらりりる所白木のあつと云ふと云ふ  
代と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
ことと云ふと云ふ

震乃云々新わく——  
つる世と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
れと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
——の武將と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
そまよい川く——  
よといまらるる法と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
らぬ法と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



少正て 勅使之事様れん成ひくうこと  
 院よ六沙いかりのちとて海津よ 沙幸れり  
 やまこころに清きつらと何んト 清よふ家事ハ  
 あらうてれ世あまたありやいなるまゝとて國々  
 の守護あつれ地政あつらいつらいついおりの  
 幸これ大徳社をれ神官いしゆれき時や民  
 一原とを祀祀くまははあてゆ下紙つくと志  
 うあるに身あがり清よ所や身あつん慶安四年首夏中  
 れ十日よおれさそをゆふ世中いしりみらて是  
 とえふおしとまよころにやははるれき佛神と  
 子まよりあつらとある人くはまきくぬるうと  
 ぬりて清るんいしとせし清るぬ海とをの利  
 なるそし郭ふれこきくぬるうとまきつてはるる

くりつんと世の人れきよこころあつる人一早苗なる  
 校女たようたよ一急きつて杖うし様くおあつ時  
 や清き遠きあつらり清貴ハ 貞照大権現のゆゑ  
 とまよい日光山よおさあそてまつるあつら  
 うるまきれよまて風のまよとせしりきまおあま  
 いまふてきよハ松風きくぬ山津よ嶺にきれ  
 いかれれおあつらさしといわゆるおあつら  
 初家時おあつ神やハありと清け濱のまおあ天あ中人  
 惟あつ家中に堀田おあつおあ対馬お内田信清お  
 三枝お佐野おハ一君れおあつ清あつらふと  
 一と 遊服も御おあつらハ大樹れおあつら

して佐倉城より拾遺補劔に宿く拜り  
位ハ之位下よつまじり世乃器めて天下を  
政政の終り終るは五川の控河に  
威光ハ八海に輝いて輝いて  
して地よ地つりきさるる死おれら後の法  
せんこもや今やひあつりぬ政えり時ハ  
氏と先んむたも退するハ智あり今令下とた  
川ハ勇ありと徳とさるる良長こいひは下  
世よはくして家綱よ長きる道とほくは  
うん一ありけ市高きるく一世あそ川てお  
なりとさるるに之君は深きとれ一良長と  
なりとと求服とさるる事こなりてき平る事

るひひらきるまれ長世觸と君ぬるに唐  
アバ出たりいふ一(堯とらよのに草踐はぬて  
人を洗り從衛とあこれと句靈と以後ハ未偶  
くつたりこる事あるに秦れ穆王群長と喜志  
ま阿いきるこるにきれ一志せらるるに  
一まんをこりりりきれ奄息仲行鐵虎  
まき事ハたひ穆王堯とら阿いりり死  
とこれらな良長なり其阿死とらもの教令  
七拾七人乞や一めらるるに  
化備者之後孔子いま一めらるるに  
の同服侯者命堯一たまひ一阿をむれ  
後志とくを生れらるるに後れ死るるに

教日志あるごとくして泣吟 天竺そのこととまじりし  
免一なるしに法ひいふし一法しりて  
よしの事としてその後皇居景離非命と兼時  
いふまじりたることありたりし野見宿禰と  
いひしもの一さく君乃後し生きたる人と埋し  
これさるるし一いふし後世ははくしんやと  
てかこととて人馬及種くぬれしとらとゆり  
天竺よりたまつる朕うまらりてとてあつらひ  
まじりてしてまのちあまを 皇系断非命  
れんといふはむしきとらしては法つたりたり  
まうあまし一同法守田道間守にひいふと常  
世の國ゆる雅時香菓とことりまはたりし一まはり

十年と強ていそきとらぬ天竺豊一まはり  
後ろねん年ゆれ方流よりりしと法強き法後  
の系よいしりし川しぬきとあまし一あま  
しるるし一まはりしやと法いまいふの時  
しるるし一まはりしとあまし時とたて法世のまはり  
まはりしとらるるふ若とくまはりてまはりし  
し一たのしはまはりしとまはりしつまはりし  
若樂のつまきまはりしと別極樂のつまはり  
心眼をひらきまはりしと人れしとまはりし  
いふまはりしとまはりしとたたりしとら  
しるるしとらるるまはりしとまはりし  
いはまはりしとまはりしとまはりしとまはりし

唐川のふも 天下のしるれはるる ちうねく 山腰のふらひ  
うねま けえたといふ ちりひ ちるぬま ちうね 城  
うまはく 株 ちうね ちうね ちうね ちうね ちうね  
ねが ちうね

速懐

信治

年月とちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

玄珠

ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

傳庵

教の事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

影隆

能く

ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

市川源

影隆

ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

傳庵

ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

能く

ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

玄珠

ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事 ちうねの事

祿子今心いづるもれ松風もはよの心らよみしおれ冬

美應成年八月十六夜東叡山玲現龍院貝

月詩歌會兼日題三首

八月十六夜

真種

あはれうも今者あましきよこよの美れ強りあつた月しく

信正

日ころめ圓海や海より老らくはるすひくあはれあつた

信治

こころあつたよきよよれあ望はてして今者あつた月をぬも

春正

いづれやあつたのうらさひひのうらさひあつた月をぬも

能く

はなつたさうよの月志念あてて心老らるるよきあ

良世

ゆー根の月とていづれあつた月をぬもあつた月をぬも

玄珠

天つたあつたよのいづれあつた月をぬもあつた月をぬも

橋上月

真種

顔とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

信正

夕ぐれあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

信治

我もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた



月兼風

真澄

秋風乃事ゆくそよきし月よは城の雲とあつし

月兼雁

信治

あつし月田のあつし月にはあつし月田のあつし

月兼田

能く

月よは田のいれくあつし月よはあつし

月兼影

景隆

あつし月よはあつし月よはあつし

月兼雲

真澄

あつし月よはあつし月よはあつし

月兼厭

良世

あつし月よはあつし月よはあつし

月兼迷

春正

あつし月よはあつし月よはあつし

月兼猿

良世

あつし月よはあつし月よはあつし

月兼鏡

信治

あつし月よはあつし月よはあつし

詩十首目録

あつし月よはあつし

景隆

あつし月よはあつし月よはあつし

二十巻歌合

春植物

一巻 丸

萩氏藤原君亮

ほろろりちるもあはれとてふらん春さしるやよの梅の香

右

片山氏安部林吉

ままふたふとせれ縁縁ささくこいらく春代れ花の香

二巻 丸

永安氏平縁勝

あつらふあそけゆく池水も又うまひよる柳の香

右

兼川氏源恒通

まそわくいゆひくわだ縁ささくあまのたの香

三巻 丸

酒井源盈清

ちりぬきいよきたやいとしの梅の香

右

河原氏平直餘

まのぬき花の梅の香

四巻 丸

恒通

ちりりてるにんごころあめの方よりトヤの梅の香

右

君亮

まはかよあそふ縁の梅の香

五巻 丸

林季

いよひとくあめささるまはのゆく春の梅の香

右

盈清

ふれつく花の香

六巻 丸

忠信

ま柳の香



右

疎勝

ひやうとちやうとちのほいひやうれ神つくくすけのちやう

夏天象

七書

た

林季

ふんねのちやうのちやうらいてし郊外月れをそくし

右

恒通

月よみふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

八書

た

盈清

みしうねんるのちやうのちやうとちやうのちやう

右

疎勝

ふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

九書

た

君亮

ふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

右

恒通

ふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

十書

た

恒通

ふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

右

盈清

ふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

十一書

た

恒通

ふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

右

林季

ふんねのちやうのちやうのちやうのちやう

十二書

た

疎勝

天来なることするこころに光るゆりうゝ顔れを

右

君亮

甘旨新文之云れ一ひしに食つるがよそ月には

秋勤物

十三番 た

恒通

あけ又んやとめる秋はく月夜なるにうららひ

右

虫解

すゆに夏しじもぬ秋の夜といふな鳴きさかしの聲

十四番 た

魚清

藤のしきれ向新くらそひて音れひやく秋のらひ

右

君亮

くわてれやとりのれ又ぬはむにーとてれく虫乃新文

十五番 た

林季

あけぬきはらやらる秋のよ花の綿れらる織る鳴

右

孫掃

あつたぢりつと秋くうらりと鳴きそとれとて川邊に

十六番 た

虫解

あけ又秋の文と衣とやふらとれ鳥のこねくらん

右

恒通

あつとよ夜と行らぬいぬそそ涙の露と袖にうせよ

十七番 た

君亮

あつと小腹行らぬうまひのこけひあつてや麻の鳴らん

右

魚清

痺麻乃こゑしあふれ下紅葉文こねは書やこふらん

十八番 九

孫清

そのよきうにまといしとくぬし松少山は縁之麻乃ぬき

林季

之こじり文へる高にみくぬて書こふしつ家さくしめ發

冬地儀

十九番 九

直務

さきそらるる花るぬ氣をくゆりやゆりやゆりやゆりやゆりや

林季

ふいふいぬきゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

二十番 九

恒通

時をぬきの名やいつくそきへはさしゆり一富土根白き

右

魚清

難波江や芋いぬかすく入舟のりりりゆりゆりゆりゆりゆり

二十一番 九

孫清

はえりるる冬さく浪乃くまつと名にふりぬぬ高取し松

右

右充

紅葉の川ぬき波はゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

廿二番 九

林季

冬之ぬ常盤の山し少はや一雪みそみゆりゆりゆりゆり代盤

右

恒通

开いて一谷れ小川しゆあて波乃るる冬くぬきゆり

廿三番 九

孫清

節はぬき衣子さいま夕暮よ衣れぬるまはいろる

右

直務

降参に海心外心に耀して茂れ若の終よきあり那

廿四番 左

盈清

山川の波にありありとわたりてわたりてはるるありた

右

縁清

此らに波にありありとわたりてわたりてはるるありた

戀

廿六番 左

縁清

云はれども幾時ぞもわたりてわたりてはるるありた

右

正館

いひてん程にわたりてわたりてはるるありた

廿七番 左

君亮

きえ程にわたりてわたりてはるるありた

右

恒通

筆よつとよきいふにわたりてわたりてはるるありた

廿八番 左

盈清

海も長らふとくもよきいふにわたりてわたりてはるるありた

右

林季

かきこひのふりよきいふにわたりてわたりてはるるありた

廿九番 左

恒通

浪よ又よ浪浪波よの浦やま川一うらむいひるありた

右

縁清

それと又人こむむやとゆきけよまた川一いひるありた

三十番 左

林季

きんらういんれりある切夫れよにいんらういんれりありた

右

君元

長衣阿のれいくよの芳終てあつとくぬく袖あつとん

二十番友

盈清

あきくれ昔ふにふる向新なるんく名所乃有明志り

丸

直作

相子事いれこのあつと貝うらふも神のぬれ思目そあき

猫場島

君元

みらぬや泣くあつと心あふとあつとあつとあつとあつと

盈清

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

縁勝

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

恒通

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

林孝

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

年門梅

君元

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

盈清

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

縁勝

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

恒通

白鳥の少少... 鳴梅の花は... 春も... 秋

梅季

二月三日... 頼隆亭... 當座

水鳥 頼元

水鳥

頼元

夜も... 池... 波... 氷... 行... 行...

落葉

必達

終... 何... 山... 山... 山... 山... 山...

草

高之

凡... 野... 田... 田... 田... 田... 田...

冬月

頼隆

白鳥... 白鳥... 白鳥... 白鳥... 白鳥... 白鳥...

文苑雜纂 甲午

正月十一日御連歌

こせしより松よかきつんあしはま  
かみあは庭のいろを落しうた  
朝日たは池乃湯湯るるこしけく  
あつひくふりぬるさささる  
縁うる昔地ふあふみゆ  
屋くれけりる末乃け稽  
旅んろこのゆき屋八月いと  
秋の志くれのくあひま

歳内立春

景隆

年れおのさく御してるまの河しはたはる辰はし

昌程

御

玄祥

常与

甚阿

時春

昌程

将筆

歳言

さうる死何名か之ーかく平河に書ゆ年しを何れ

元日  
うらひな候のあつまふとりせー八百五式と結ぶ水

子日  
たひさ子松よ少去に蘇代政法ひあつてむく子日る

若菜  
いーせまの消への雪海といは河ま沢のつれづれ

六月二十九日於中山信治亭詠詩歎

水由納涼

義概  
水由納涼  
志とそり終るびあふ料涼  
立詮

涼ーこのい川くあまきとそりー家流とそりあ池の流

後顯

陽春ーてあう結涼ふた其成いそるな乃池水

信正

長流よあまの流と神と信正よ乃みれ水

信治

乃池よー春の流水ぬそりに夏のあまね初事の涼

宗好

乃池よー流水う中れ夕涼よあまのあまのあ

良世

乃池よーあまの池乃流よあまのあまのあ

延室



秋の来たるは原の草もさきさき秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
毎家有秋

雲がくさくさの原に秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
義概

八重ははらばら者の秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
立給

あふるもさきさき秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
信正

天ノトや秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
信治

あふるもさきさき秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
宗好

玉乃さきさきの秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
良世

近うとさきさきの秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
延宣

あふるもさきさき秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
詩十六首畧く

仙洞御製

速懐

今れをいさかひの原に秋の女もさきさき秋の女もさきさき  
道行

道行

踐祚之抄

あふるもさきさき秋の女もさきさき秋の女もさきさき

後光厳院御遺言

仁洞御製

折くともたふひいつねもあまのよみよし海乃きよひのあまふ

文苑雜纂 乙未

正月十一日御連歌

松きうーとあひーほてうらふれつら  
あまのいめれあてと御連  
丁名きつるたふのきり菜といて  
ひうりいさうふ野道のたれ  
あまのきん月やうねささし  
はくうううやこんきんく  
全のぬいゆとてうき夕るくれ  
飛うくほさるのたはーま

昌程

御

玄祥

学也

基阿

昌蔭

物業

昌程

八月十日夜於 仙洞御會御當座  
十日夜月 智忠 八条

君代といくよ露中乃秋のよと望りてととむ雲上りの月  
月前川 基福 園大綱言

天原雲をいれうも文不夜月小をいれ好れを  
月前夜 竟然 妙法院

雲あふれ行なうに河のあなえとみそく屋の月新  
山月 御製

花の秋乃露中の月と露うーとみよの月  
野月 嗣孝 菟中納言

小秋はく花の秋の月と露こふはにさあえの月  
浦月 道晃 聖護院

あふれいそいそとと河の浦波乃あなこころ月小河  
花月 宗種 菟中納言

月今宵いつくはきこふ系たきと花乃秋あを  
あつ月 資行 柳中納言

きひ衣いくまの雲あうるに八月乃あつ  
山家月 雅直 飛鳥井中將

山さくうま<sup>世丸</sup>らうとれあそりうもむとつ月とく  
月前唐 為清 冷泉中將

秋の池の月とあつる水はあな秋とくう  
月前出 為继 冷泉中將

くうりうまあめ城うとくは清き系月山  
月前澄 雅喬 白河三位

山の塔の月に入るの秋とて 本遠志の山に心の一なる

月よさういづくといふときと涙よとて 向秋のうし

寄月速懐 資忠 劫海田中

秋は月よさういづくといふときと涙よとて 向秋のうし

寄月神祇 具起 岩倉中納言

柳葉の秋とてみせて神垣の秋とて まさうな夜半の月が

八月十日夜 貞信

月よさういづくといふときと涙よとて 向秋のうし

君充

月よさういづくといふときと涙よとて 向秋のうし

盈清

江の畔さうてい秋はさやけきたる まさうな夜半の月が

縁勝

いづく秋のま まさうな夜半の月が

林季

何しりの山に塔とて まさうな夜半の月が

月照流水 盈清

忘れたる まさうな夜半の月が

縁勝

何事よ まさうな夜半の月が

山家秋月 盈清

山家は まさうな夜半の月が

見月恋古人

君亮

月小もそ世あてぬくさあ月一人のあき世の秋かひるをた

盈清

向新乃かきぬ月乃うまらうき縁じく月今を恋し

縁勝

月よぬくあき女いし人まてしおひのこも獨居れあ

秋明月酌酒

盈清

大方の月よえしはしうと秋てにぬくる平ゆあさき

貞信

てる月乃むらりと川も雲ふ秋くみたてる阿きし酒味なる

林季

くみてるふとききしとむし月れえとのみくあくるさうりき

背燈芸家深夜月

縁勝

さしひれく祓やれ灯も消て光はゆきぬとぬる夜の月

寄橋月

林季

中絶る久並路乃くく一之思乃月よりかまひを海に

寄月恋

貞信

清りる袖よつとさそあさりか家下る月れ秋とるあは

陽曆二丙申歲八月十五夜兼日  
詠五首和歌

此は會歌貞享二卷  
かゝ今更に入

春月

三位中將源朝臣光國

月ハ平クハ流リシメ 夕暮ルルヤ 履ルルヤ 足ハ山ノ

夏月

五月廿九日 夜半ニク 水鳥ノ音 著テ 河ノ水ニ 流ルル

秋月

心ハ高ク 秋ノ夕ニ 暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル

秋月冬

秋ノ夕ニ 暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル

冬月

秋ノ夕ニ 暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル

春月

侍従源朝臣賴元

三月廿九日 夜半ニク 水鳥ノ音 著テ 河ノ水ニ 流ルル

夏月

五月廿九日 夜半ニク 水鳥ノ音 著テ 河ノ水ニ 流ルル

秋月

心ハ高ク 秋ノ夕ニ 暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル

冬月

秋ノ夕ニ 暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル 夕暮ルル

冬月

三月廿九日 夜半ニク 水鳥ノ音 著テ 河ノ水ニ 流ルル

春月

侍従源朝臣賴隆

三月廿九日 夜半ニク 水鳥ノ音 著テ 河ノ水ニ 流ルル

夏月

終夜福やう月をよみしはらりしきよ風と雲をた

秋月

吹くよこりれらに雲をたふふらる秋は雲の月

冬月

庭の向の茅葉しやうに雪に雲をよみしはらりしきよ

夏月

おろくもやも記えしきよをたふふらる秋は雲の月

春月

庭の向の茅葉しやうに雪に雲をよみしはらりしきよ

夏月

正夜しはらりしきよをたふふらる秋は雲の月

秋

おろくもやも記えしきよをたふふらる秋は雲の月

冬

おろくもやも記えしきよをたふふらる秋は雲の月

夏

おろくもやも記えしきよをたふふらる秋は雲の月

春

おろくもやも記えしきよをたふふらる秋は雲の月

夏

秋

冬

冬

春

藤原定久

ふらふらしてゐるふらふらなれば夜のそよ風もあつらひに靡む日影

夏

ふらふら山の隅とくは月影まじりて中をふらふらるる花影

秋

山は清く梅はこもれ小雲晴てそよ風もあつらひに靡む日影

冬

ふらふら山は清く梅はこもれ小雲晴てそよ風もあつらひに靡む日影

冬

友をいづれもいづれも今日あつらひに靡む日影

春月

源貞信

咲は花は光とくは月影まじりて中をふらふらるる花影

夏

ふらふら山は清く梅はこもれ小雲晴てそよ風もあつらひに靡む日影

秋

山は清く梅はこもれ小雲晴てそよ風もあつらひに靡む日影

冬

芳野川少ふ影はしほくもあつらひに靡む日影

冬

ふらふら山は清く梅はこもれ小雲晴てそよ風もあつらひに靡む日影



春月

安陸林季

あふれりしうらやまの久保此月よりきき今やあふ

夏月

いづるもやそ交りてしうらな月にはいふよりのあふ

秋

天は戸とあふりていづれもあそむの秋はあふ

冬

あふれりしうらやまの久保此月よりきき今やあふ

恋

あふれりしうらやまの久保此月よりきき今やあふ

春月

近衛前殿下姫君

夏

秋

冬

恋

春

本室相藤原光長女

あふれりしうらやまの久保此月よりきき今やあふ

夏

あふれりしうらやまの久保此月よりきき今やあふ

秋

雲霧の空方にらりて秋風は月吹にやあけぬもあは

冬

冬うれの木ぬきさびしくも月れ新いさぬる庭乃白き

春月

村上氏某女

あきけけ新いももみれきとらこめてあけりにもあつらるは秋の

夏

なになれ夜半涼何して夏山の木れ清うぬるも秋月新

秋

急思の雲霧も秋風は山の清いつる奇日まもあは

冬

山はしらついでい木の葉をそめてしまふは月や新とさか

冬

月うれあもえよあこめて雲井はおとつらあはる

春月

源光女乳母女

云は秋の庭うぬあは月はきとらとまはるんせぬえら

夏

水は面よきりももは新いせてあつらるは秋の

秋

秋下はるはあつらるは月新い光をほきるもあはるも

冬

あれのいるあつらるは秋のよはあときこもるあはるの月

巻二

あつしとて思ふちきり一とよの美れを昔あたるる月とよはけり

十六夜月 十六首

舟木

隅田川より舟秋よあつあつまほよいし月なるをけは  
雲も今宵ハ半も一はし月をみればとよあつしに  
らまめて月ハなるをといひあつとよい思ふあつし  
月入つて程も思しんちよれんとわさよ今宵あつし  
えよあつしとよい顔の名残ハあつての月とあつし  
うきあつしたりよとよあつし今宵あつし月と  
あつし月とあつしつとあつし思ふもあつて今宵月とあつし  
今宵あつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし

あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし

詠戀三十首 和歌

秋中恋

林季

あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし  
あつしあつしあつしつとあつし思ふのあつしあつし

神君遷

あつひゆさうたより神のあはれはさういふよあひのり

：君：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：祈：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：言：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：通書：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：契：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：結：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：終：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：書：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：言：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：月：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

：音：

あまより神のそあはれはさういふよあひのり

寄風恋

人々牡丹をよこしつゝ神よじりあはれちるるをいふ

こ黙こ

移りまてく牡丹の行の如くならしむるをいふ

こ鳥こ

えれはゆれそとす川名におもひぬくはれぬをいふ

こ雲こ

清らひて更なる夜半の昔れ雲のちよふらるるをいふ

こ草こ

いろくよまよとらしむるをいふ

こ木こ

中経おひのいろし言盤ねらふ世の縁とをいふ

こ道こ

きくぬちの草の半道よりいふをいふ

こ川こ

さゆてはる坂いらんみと川のこせぬとをいふ

こ海こ

淡せく神はらむの海をいふ

こ雲こ

急にあらぬをいふ

こ山こ

はくしとていふをいふ

こ雲こ

あはれいそこのをいふ



うやむせのきまはては川のさけりよみたる水は春風

綏光 廣徳中約言

急務をせりも此はゆゑに松も花もはほとみさ福ん

資慶 鳥丸宰相

翠りたるて家君はよくけりも神代あつちる春もは花は

時庸 平松宰相

あやの程はあふる花は交はれ道きつさねはあふり

光長 竹屋宰相

た乃つらうへはんときさる春はほきやね雲乃ふらふの

孝治 竹内三位

年くは縁とらふらる松のえれはまはらふ云は長来けり

永将 高倉

柳の代乃はのまゝさる春風や柳の糸よはけり

氏信 水尾殿

もあつちる花とみさるてまはら春乃はそはとあふ

教廣 滋野井中將

いづら縁ふあて松も春はらを乃は花は

光久 竹屋

あやの神もやあは春風まはる代もは

玄陳

あつちたる時國氏とよまきさる春もは

玄俊

十乃は花もあはらる春はなまはるあふ

正月十一日殿中御連歌

世よみては縁の世まやみと春

天はよ日の長あまの心

羽衣屋のねらみ子あえく

おと比ねりきうし田の東

川の末しあやこけあらし

外一のあつては川のあつては

音なきくおぼの月をたうにて

いよよやえりきあめの山きれ

昌程

御

玄祥

常与

基阿

昌隆

玄隆

昌益

いよよやえりきあめの山きれ

仙洞御製

山はあやなきあらしの秋のさびしき

屋のねらみ子あえく

雲の後又よみては縁の世まやみと春

悼應山殿下經文和歌

未顯真實

院御製

あやなきあらしの秋のさびしき

入於深山

光平 二瀬右大臣

雲のあやなきあらしの秋のさびしき

聞是法亦難

經季 今出川大納言



えにーありやせしゆてすれまうす法乃行しよのり  
之思を安慮慮 貞清伏見

世の中れをふらやふれんと行しよ法乃行しよのり  
報佛之恩 庸道 二條系抄政大文長

いふして此を法乃行しよのり  
隨分受潤 竟然 妙法院

あふふのりさるるこし千世の法乃行しよのり  
除熱得清涼 道晃 聖護院

えりるくんと法の法乃行しよのり  
從實入於冥 尊純 青蓮院

おのりよふふと云きりけし  
永取繫珠 通村 中院系門前

きたるをいふしよのり  
種佛通因縁 綏光 唐鶴等お

えし者と妙よとくみ終とーいふとや後の春とゆしよ  
澤定知逆水 永慶 言舎大納言

はゆえを教に美わしひらきあてしそりり  
此経難持 季吉 滋野井翁云

ひすしゆれし根志法乃行しよのり  
採果汲水 雅章 飛鳥井等お

水とくしよのりとりて法の道三城きしよとせれしよのり  
但惜無上道 基定 持以院等お

所ふたてけしよのり  
常無憂惱 資慶 鳥丸等相

暖らぬ法法の流れを事志めてよの如しひるきしる事とせむ

如蓮華在水

尚嗣 道清大納言

木と物池のうらもをのても物にうらよ志はぬとせむのあらは

壽命無數劫

光長 竹屋宰相

念ふまゝ一毛の林れまうりにまきぬ命やめきりかゝるん

一念信解

宗種 難波宰相

暖れ一花まゝあめ下四方に河ま移くありの春風

如是展轉教

時庸 平松宰相

はるかにあまれと法と法のまゝあひはきをぬ物れ山川

莊嚴六根

公業 阿野中納言

一光くり時由雲のす物ふとさるゝぬ月の光とせむり

我不輕汝

信總 山科中納言

冬結をたろくまゝ一とるゝのまゝの如きこもる積と

如一佛土

稚宣 飛鳥大納言

なほあまらまきよた法はあいつくおあまらまらひる

各還本土

兼賢 廣徳大納言

はこしる佛のゆつりまふくまてかゝるゝれ法のもの

還復如故

通純 中院大納言

境をつる神のいりやまゝらるゝはれ物とせむるん

現一切色身

良尚 竹内

今とあるゝぬえおはと境はくゝしつあらうら

弘誓深如海

慈胤 梶井

あめくらうひの海と境まきあはらるゝんあゝ風まら

今得安穩

後完 小川坊城大納言

らりもせも御牆とふそよ九重の月影いさくぬまの月影  
心必清浄 帝尊 糸満院

いそひつ凡のうき言をなれく必月の影やとあ  
不頼不慮 智忠 八條

らうひつ法のとこととくらにぬのい様ひのじり  
歡喜奉行 尊性 大覺寺

ほのそがらとよふな陰りきてあひつ法の末はまじ  
御中陰時壽量品御書寫包紙

誓ひ山帝にあり月の影ぬえとまに道はあ  
神と月時あふまううさる城をとおひつ神はあ

九月十三夜

景隆

いそひつこひんあてよりあひのふや月ふつあ  
ひ影あひ一人とやいふてふ月ひこひの影とあ

貞信

なれ夜とふそやうなよる月のみよりあ家今月  
るにうき名物の影あひあひあひあひあひあひ

曰一夜中山備州牧席上

一方

閑庭薄

誰とこととまひくや庭のいとまひあひあひあひあひ

流習

ふいそは野ふれ何の名もふ庭のうきやあひあひあひ

宗好

あはれし神をまきん祭りまよひて神に遊ばしめり

宗信

こころをなごむるの成るるまはのまよせしる者なま

延皇

まよふまよひつらなるのちかとのまよふる秋のゆふれ

後世

秋はしるあはれぬ庭の果はゆきとまよひ神をまよひ

信信

はれぬまよふまよひのまよひつらなるあはれぬ祭りまよ

文苑雜纂 丁酉

歳内立春

景隆

一夜ふかふかなる年れ内に立春にふた大地のりり

歳言

浮沈を流てくまき年あまるとまひるまよひつらなる

元旦

まよひ動ぬる祭りのまよひつらなるまよひつらなる

歳菜

はよまよひつらなるまよひつらなるまよひつらなる

歳旦

貞信

春まよひつらなるまよひつらなるまよひつらなる

正月十一日御達歌

去れさよはるをそまやあはれ春  
長采もきし山成つらうとを  
恒築し池邊の辰きまいたらて  
氷なるあゝ思ひのちん水  
鋤あめし田白の系や廣うらん  
こころの浦く求食芋因縁  
月うつる禁扉は唐の海りしあ  
あひく尾花のこころと夕露  
尾花やと乾く此の海りらん

御

昌陸  
玄祥  
宗五  
恭阿  
立詮  
竟盛  
昌程  
執筆

海恋十首和歌

貞信

初恋

大い初るらんまといらうあはれ神よ  
因  
何あめし川ぬれりあはれ地を  
君  
宵くし君さうさの海はるあはれ  
見  
花よの貝し向新の消聲そん  
契  
まはらうらうの無いらるる望りたきあ  
別

つれぬのふらふらにたぬおきつぬるまむい今下りたり

白草のつるさうさういひて枯れぬの言はぬ

詩

恨よ海無ぬわの事いふに夜まに夢交りの歌ありと

新

さうにたぢらじやとまわりの川に流の波と神よけまや

歌

夢やうたはれ流のちる波のちるくさふと春とま

二月十日のちり神田とらふふはひ

頼元

春をを成ちる深けけて候花れ白波にふかまぬまふ  
印きある松のちぬく勢絶て花もやあじまのふ

頼隆

たつらてまぬ白女は候はく花といつぐとほてま

隠類めてまらぬらとらふ

頼元

風よ田向の林とあをてまらぬらまらやあもるあ

日やまきとらふ

頼隆

河のほとりには山ありて雲は白く霞は青く  
折角の好景をまよふとて

渭川

柳をたふし風をたふしてこころゆく言ふは  
又花のいろ

春のあはれをこころに梅枝

仙洞御製

浦乃名とて一の遠きより六の近き  
花の影は思ふらうの垣は

九月十三日復務のあはれ

景隆

こころのこころをこころに  
こころのこころをこころに  
こころのこころをこころに

小朝十雲と歌

丁酉十一月五日友之席上  
新標出十故事詩畧

文武珠雲 弘仁銀雲 道雄梅雪 清貞柳雪

清公汴雪 今継信雪 冬嗣殿雪 貞全樓雪

利仁夜雪 頼義府雪

或はしりゆふよかへ通紀

網政 松平行春

的麿三年神を月初に大樹を  
羽林をかく志をこころに  
弟に袖をついて一娘を  
初十日早うんかると神を  
紅葉の端をこころに

おきけり河を舟りて雲霞をぬき霧を分けはるるく  
前途のくらく成ふまじく君しひうそりうらひ  
一了すべし別すんち一人ほそく物にいと何あは  
落さぬ

かきくしあきしうらひ勝衣をぬき霧を分けはるる  
十一日お別小田原よりやうね有つて中より水友兼後浪  
をんまははゆく夜すすくたきあし

あまのむらさき後浪のまきそく勝衣の床に敷いじりて  
十一日お根と紙坊のしゆしけく落雲海とうらひ  
あはらけ半きりきたあはれ紅葉敷ゆる泣のしり  
わきの雲葉のふよひくくてあきくこら子見く  
つーはゆめしわくはあししとおはる

まうけお根のふよひぬきをぬき霧を分けはるる  
殊よあはれ雲霞をてくぬき遊しうて勝衣をぬき  
雲霞をぬき霧をぬき霧をぬき霧をぬき霧をぬき

あまのむらさき後浪のまきそく勝衣の床に敷いじりて  
あまのむらさき後浪のまきそく勝衣の床に敷いじりて

あまのむらさき後浪のまきそく勝衣の床に敷いじりて  
あまのむらさき後浪のまきそく勝衣の床に敷いじりて

あまのむらさき後浪のまきそく勝衣の床に敷いじりて  
あまのむらさき後浪のまきそく勝衣の床に敷いじりて



まゝい名を中えらるるらんをさき一我流中てを  
又ハ物ふし何れも海のあたりになれハ河ハ川を  
之候勝をせりやしあつら粒を根の雪小白雲よりあハ  
又ハいよふしつきも宋朝濃蘓子瞻西湖也西音晴好  
こよ歌也若採西湖比施子淡粧濃抹兩相宜こけり  
やハこの心りハありしとれあふれん代くれ人とめて  
う歌大和奇都良香ハかけら文うらたゆるら  
ありあふれしといへく尺さとしは後ハくらのハ  
宮古よつさるハ身おし現もふきんくふらとて  
いと約とうあてたう成布ふりきしはく  
家はとてあや強ん事海のくものあつあつ根と  
しき海ハ東波見やれん後よるる浪の白き衣と川に  
おらるるわい

あらぬのらりしき浪とてゆらぎて後川をのりき海ハ東  
浪更てまよつたたとてつたにありけのこよふはかりし月  
ありとあつて後ハく

不ハくしきおのり美れ月ふはるあけけの夜中をさきハ  
まよふるこよふとてあつてし月ハかふとあは浪のまよ  
浪のまよれ松江はわいひくゆめえとわい

まよふるこよふとてあつてし月ハかふとあは浪のまよ  
十日は月とあてら川の山ハまよらりあはな工ありと  
山のまよけとてつたに遠きありし月ハあはの紫敷とく  
指ハ家ののりわい

まよふるこよふとてあつてし月ハかふとあは浪のまよ

宇津乃山と綴ては草も根もやらりある浪の親を  
さひさひといふるな——源宗平の長う山はと  
そさひさひいふるな——こと今もた——さ  
志ありの草も根もやらりある浪の親を  
はらわつたは道なほかきつてはつたは  
十日の浪とあて大み川とつては  
よりとあまきやうと——波の浪も若むせふのなま  
水産と浪の結るな

ちと波う大み川とつては  
合意のこ海軍もまきつてはつたは  
星のなまきつてはつたは  
花よ入るなつたはつたは

よ——く

張るま横とつて葉門のうらなはつたは  
ちと波う大み川とつては  
よ——く

うと島に海とつたはつたは  
秋のうらなはつたは  
天にうらなはつたは  
浪ようらなはつたは  
十六日よらなはつたは  
——方よらなはつたは

しつて西のまらうの東にうくとあそくしてなま  
時漢人釣客なるもの垣家もやあつたようにうきうき  
さししつてまてをよらちをひらうりまよふまきま  
藤もむいあういしとあはれまはらうあはれあはれ  
福あきまり糸なるうきうきとあはれまはらうあはれあはれ  
よしうきあつたうらにまらういしはまきあはれあはれ  
うらとあはれまはらう

梶花にまきあつたうきうきとあはれまはらうあはれあはれ  
十のうきあつたうきうきとあはれまはらうあはれあはれ  
あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう  
山のうきあつたうきうきとあはれまはらうあはれまはらう  
比類類とさそいあうらとあはれまはらうあはれまはらう

雲のゆらけあつたうきうきとあはれまはらうあはれまはらう  
あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう  
あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう

あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう  
あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう

あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう  
あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう

あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう  
あはれまはらうあはれまはらうあはれまはらうあはれまはらう

唯夏のやうに暑くて

夏とのまじり海に流る川りともあるぬれとに集り  
十九日のこぼりの坂の下と名を夏とじう鬼神は短  
衣もや坂上りらるおやあ——ときお母せこし成りけ  
短りりころやそれ鬼とあら海——家とらんけは鬼も  
まじり海もおそろし——きいよや成るの上は鈴鹿明神  
とて河もあまのうらむ——よりすそおとろく  
しき流川も鈴鹿川といわれなり名を記念亦  
あまのたうにやまんも——ちろくして  
格衣も成神とありとも川八十段の波も流るもそ  
よも流るも文りらり祿れさむ——流よはきぬとも川  
りも流るも浪の若よりすうら岡河——ぬれに

流のそ名やまじりよそそそそ——くものそそそ

いは——まじりあらぬ流の川もそそそそ——  
昨日の流もやそそそそ例もあらとけいよ——  
あまのそそそとあらりぬ

いづれもあまのそそそそ流るうらそそそそ神もあまの  
あまの伏見も入結る日さひのうらうらおほくあまのそそ  
く——あまのひて筆とそりあまのそそそそ  
あまのあまのそそそそ及もそそそそあまのそそ  
流るうらあまのそそそそ

あまのそそそそあまのそそそそあまのそそそそ  
あまのそそそそあまのそそそそあまのそそそそ  
あまのそそそそあまのそそそそあまのそそそそ  
あまのそそそそあまのそそそそあまのそそそそ



河一川の草紙此ころの葉は所々にははれはじりて  
かきつらぬ一巻しなる事うそふあるは初巻  
の巻乃ち青き文はこれとあるなり一巻紙白き  
きりてそ青白なるきりてあはれなりは書は  
かきつらぬおこしはきこころは  
後の年ぬも君らん川はんより好書  
物なるは  
祿ハ物川ぬあはれら  
とぬらぬ

